091213−000−2

特43−49

縫繡葵裲襠

琴亭　文彦／著

M17

DBN−2061

佐の松事件縫も亦葵の補襠

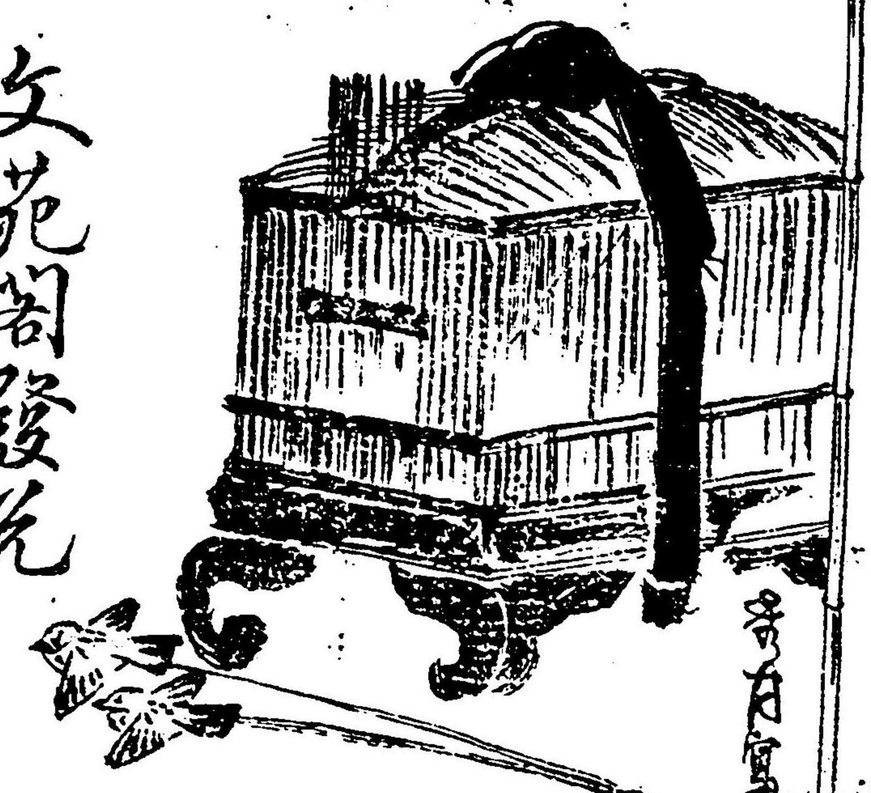
故人の書を著すや、縱令けづるき草冊子、合巻物の類ひと雖も再三再四文を練り、叮寧反復字句と正し、始めて之と梓に上して、世人公けにする者あれば、趣向の奇なるいつれも及ぶべ、抑揚波瀾照應の文法も亦自然と備はり妙味も一層深からんれども、當今人情甚だ急噪く、早いが仕勝の世れ中なれば、發兌を急ぐ板元の矢の催促に責られて、作者も筆の走り書魯魚と正すに遑も無く、たゞ其迅速を貴ぶ。真に怪しの世界なるかな、茲に綴りし補襠も、書肆が指揮に仕附学通り、僅に筋を知らんと旨とし合ちね勝ある

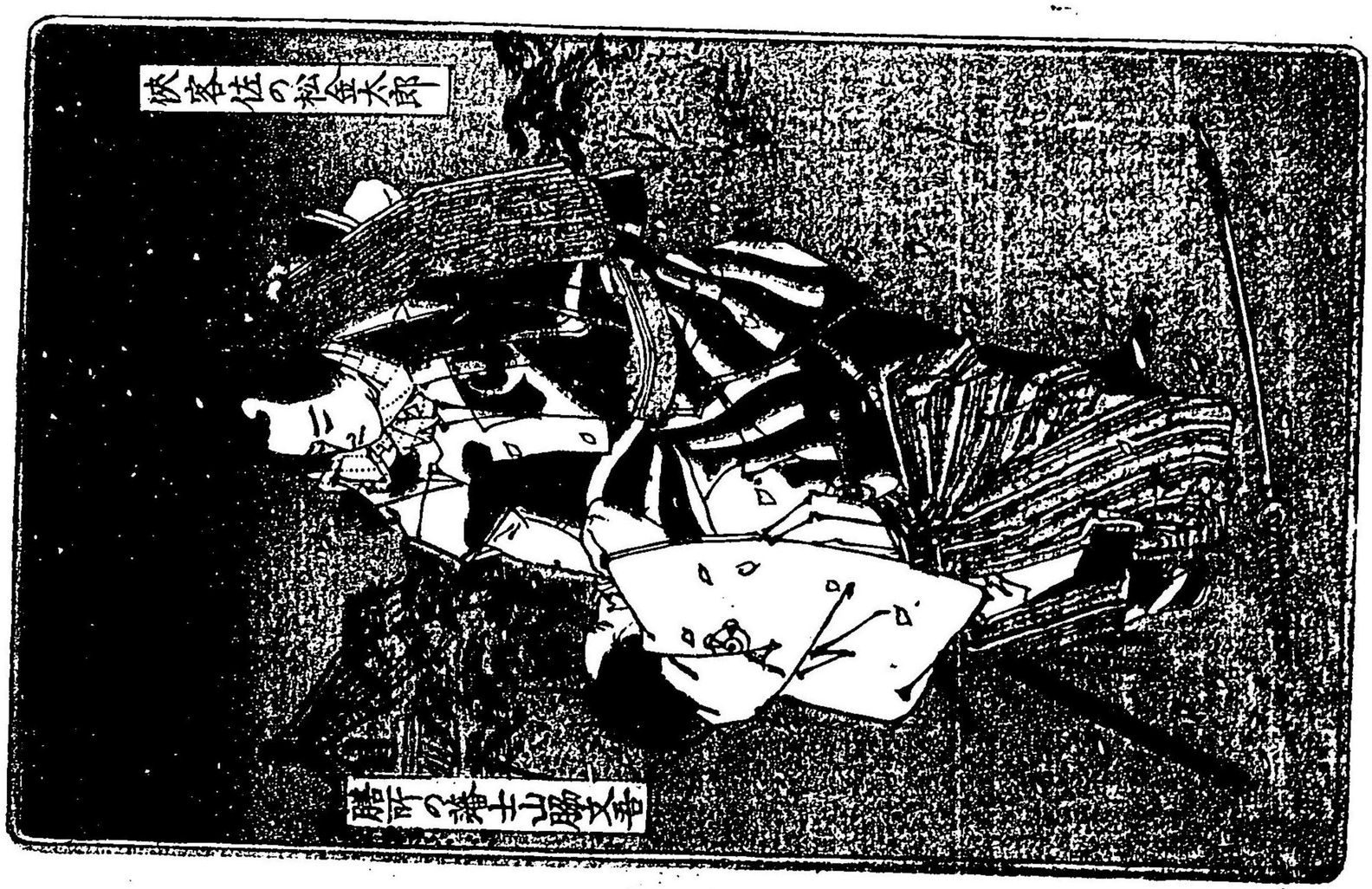
佐の松事件縫

葵補襠

冊子

文苑閣發兌




佐の松先生の弟
佐の松後妻お亀

佐の松先生の遺骸
佐の松先生の遺骸

つぢ褄と漸く纏めし新形ら俄ら仕立の縫摸様絲のうちより筆の道拙き手際の作案あつて唯ど御愛顧の厚綿と願ふ意の待針ふ時の流行ふ後れぬと針孔と賣出す晴小袖昔時の絹布に較べて地合ハ少し劣るとも時候ふ後きぬ用心恰好五月の賣出しハ時に葵の縫乃紋盛り久しき御評判と板元ともに希ふと云爾

明治十七年五月

琴亭文彦識

佐の松縫繡葵裲襠事件

○第一齣

野崎城雄

茲に説出す長物語りハ現今横濱羽衣町にて格と共に其名も高き劇場羽衣座の座元たりし佐の松金太郎の畧傳なり同人の素性と聽くに今を距ること六十餘年文化十年の出生にて父の名を源次と呼び京橋柏磐町の邊りに住ひて久しく消防夫の仲間に入り人にも大哥と立られ居たるに金太郎が十九の時父ハ歸らぬ旅路に赴き貴泉の客と成果たれバ殘るハ母の某と二人暮しの痩世帶爲す事も無く日を送り茲に二年を過せしが弘化四年の其年も明れバ嘉永元年と改まりたる花の春亡父源次の朋友なる東會所の爲頭秀次郎と云ふ者が我が妹のお芳と呼べるを金太郎に配遇せんとて此由本人金太郎に只管勸めて已まざりけれバ同人も納得して其年の三月比お芳を妻に呼迎へ中睦しく暮せしとぞ比しも春の末つかた今と盛りと咲く花を眺めんものと群集ふ上野あたりの人の山

茲い同所の廣小路廣き街衢を狹氣よも肩怒らして歩行來る四五人連の一群い長き刀の一本差し足輕体の服裝なるが早や充分に酒氣と帶び一歩い高く一歩い低く蹌踉來りし折から一廼の職人が急ぎ足にて歩み來る機會にバッタリ衝突れバ此方の武士い眼と瞋らし襟髪取ッて大地へ引据ゑ「素町人の分際で此大道を除けもせず武士たる者に衝當るい身の上知らずの無禮者手討よするから覺悟をしろと敦圍ゆらく罵れバ同じ連ある醉漢も對手欲さの折柄あれバ皆一同よ大聲揚げ口に委せし惡口雜言餘りの事と職人い素より勢ひの江戸ッ子肌覺悟を極めて大胡坐「衝當ッたい五分と五分此大道い武士が通る計りの道ぢやァねえから群集の折ゑやア些とやろッとの間違へ位へい有がちダ夫も其方が生醉ゆゑ謝罪て遣りやア增長し刀ゑ捻くり廻すからよやア夫で己等と斫る氣だナ其鈍刀で江戸ッ子が斫られる物なら斫て見ろと起立さま身搏してハッタと睨みし有樣に惡さも憎しと醉漢共い一同刀をスラリと引抜き斫て掛りし騷動に四邊の人い打驚きスワ人殺し喧嘩よと右往左往に逃まどふ混る處へ金太郎い上野の觀花の歸り途鍋ゐて一杯傾けプラ〳〵茲へ來合せしが夫と見るより閃かす白刃の中へ割て入り「暫い知らねど此喧嘩對手い一個此方い大勢殊に白刃を振廻すいお武士にも似合しからぬ大人氣の無い此仕方怪我の無えうち今日の喧嘩い己等に預けてお呉あせねと宥めても猶附け上り此方い刀振上て「入ぬ處へ出酒張て留立をする上からい汝等も同じ仲間で有らう刀の錆にして遣るから觀念しろげと斫掛れバ金太郎い憤然と怒り「是ほど男が手を下て頼み込でも聽入ざァ最う是からい己が對手ゑ其處動くなと言ひも終らず打込む刀よ身を換し先に進とし一人の帶際攫んで投出せバ跡に殘りし醉漢共も金太を目掛て打掛るを同人い事ともせず飛鳥の若く身を働らかせて挑み戰ふ有樣よ彼の職人も力を得て落散る棒をおッ把て薙立て〳〵進み寄る其勢ひゐ辟易して五人の武士い一同に始めの櫂幕何處へやら刀を退て一散に上野の方へと逃行くを追ふい無益と金太郎が袂の塵を打拂ひ彼の職人に對ひて言ふやう「何處の兄ィか知らねえが無法な奴等に邂逅て嘸隙潰しで有さらう復彼奴等の來ねえ中些とも早く歸ンなせえト言れて此方も會釋

して「大哥貴丈が茲へ來て助けてお呉なすッたので危い命を拾ひやした何れお禮お參りやせうから居處を知らせてお呉なせエ」「ナニ是しきに禮抔を受る積りい微塵も無□△すると事も有らんと然あらぬ体にて時を移し其日も夕とありし比最前逢し職人が手に酒樽と肴を携へ門口より壁を掛け「大哥先刻ハ貴丈の庇蔭で命拾ひを仕やしたからお禮心で詰らぬ肴と提て參りやした一杯飲でお呉あせえト言はて此方

が有たら寄あせえト右と左へ別れ〳〵左の松い途を急ぎ我家と指て歸へりしが今日の喧嘩の有樣を若し慈母に打明さバ心配△

い折惡い處へ來たと思へども情無歸しもせられぬば先づ能き程に挨拶すると客い夫とも氣が著らず「己い兩國立花町の熊次郎と云ふ遊び人打と飲むどの其外ゐやァ所長の無え野郎だが水道の水で湯產と遣ひお江戸で產れたお陰にやァ人に負るが嫌えゐ性分先刻大哥が白刃の中へ微懼とも爲ねえで飛込だ氣前へスッカリ惚込でどうか乾兒ゐ爲りたいと思ッて態々來やしたから今日から乾兒にして下せえト思ひ入たる有樣ゐ金太郎も小膝を拍ち「始めて逢さ此己と見込で乾兒に爲りたいと言出す氣象を買込で及ばず乍ら世話をもしやうから是ゐら折々遊びに來あせえ先づ近附に一杯遣らうト携へ來りし小肴へ鱠刺身を取添て互ひに膝も打寛ぎ暫く酒盃を巡らせしが何時しか其夜も更行きたるに熊次郎い忍着き別をを告て歸りたる跡見送りて次の間より母某い立出で來り「金太ヤ先刻の談話を聽きやァ上野で喧嘩をしたさうだが亡ゐッた嚴父が吳々異見をした通り一体喧嘩と云ふ者い容易に始めるものぢやァねえ況て對手いお武家樣若や負傷でもした時い女房や己に歎きと掛け心の安まる折い無いから老先短かい此已を切て目出たく見送る迄斷然喧嘩い慶てお吳れ夫が何より孝行だト何歳になりても子を思ふ親の心に變り無き親身の諫諭ゐ金太郎も額を撫て謝り入り「慈母堪忍してお吳れ是から喧嘩いさッぱり廢め阿母に心配いさせねえうら案じあさんなト打解し話談も未だ終らぬ處へ手荒く門の戸打敲き開よ〳〵と呼ぶ聲に何心なく金太郎が表の潛戸引開たる後の話談い次回を覽る可し

○第一二齣

潛戸瓦落理と引開る機會ゐドヤ〳〵入込し五六人の足輕体中にも頭と覺しき男い短かき小倉の袴ゐ穿ち長き朱鞘の刀を横たへ鐵扇を右手に握りてツカ〳〵座敷に打通れば後ゐ從ふ足輕共い熟れも最前上野にて喧嘩を仕掛し人々なるにぞ偖い先刻の仕返しゐ態々來りし著あらんと心著きたる金太郎い女房と母に目視して一室の中へ追遣つゝ恐るゝ色無く容と改た先「見れば見知らぬお武士夜更さふけに案内なく人の家へ踏込むとい無作法ト詰れば此方い目に角立て「イヤ見知らぬとい言はせまい最前己の組下の

此人々に虞小路で抵抗をした而已ならず恥を與へた禮に來た恰好其場よ落散し此財囊が能い手掛り中にい而も常盤町金太郎と記してある書簡の名宛を當にして遙々尋ねて來た己い淺利川岸の稅所本多で足輕頭を勤めて居る山脇文吾と云ふ者だ斯う何もかも打明て主人の名迄を知らせた上い命を取るか取らるゝか肩を結にやァ歸られねえサァ起立つて對手にあれと罵る言辭を金太郎い半分聽かず冷笑ひ「何の事かと思ッたら最前上野で此方衆の喧嘩の對手に爲たのを遺恨に思ッて來なさッさか其りやァ大きな量見違へ已ちやァ無理にお前達へ喧嘩を仕掛た譯ぢやァ無し觀兼て止に這入たを聞入ぬから仕方が無く對手に爲た此已へ仕返しをする量見とい飛だお前の見當違へ顏でも洗ッて出直しなせえてト取ても附かぬ返答に此方い彌よ急立て「ヤァ此期よ及んで彼此と命を惜む道口上い男にも似合ぬ卑怯あ奴「是でも左の松金太郎卑怯あ心ハ毫しも無えが僅か一人か二人の職人而も得物も持たねえ者ゐ追立られて逃出すやうな武士達い對手に不屑ダそれとも腹が癒ねえゐら己等を撲つとも蹴るともして仕返しをした量見でトットと早く歸ンなせえト言えれて此方い顏見ゐはせ「ムゝ面白い望み通りに己か土足に掛て遣るから覺悟をしろと言ひも終らず片足揚て丁と蹴るを又傍らより一人が拳と固めてハッシと擊ち或ひい蹴返し踏にじり心の儘に責さいあむと心地よげよ見居たりし山脇い暫しと押止め「此奴い復び吾々へ抵抗させぬ目標に斯して遣らうと手に持し鉄扇振上げ丁と擊てゞ額い破れて迸しる血汐の流れを見るよりも最う是迄と金太郎が憤然と怒りて山脇に飛掛らんとする折しも一室の中にて母親がエヘンと知らする咳拂ひゐ偖い最前慈母に皆ひし言辭を守れよとて我を止むる咳拂ひか喧嘩とせぬと約束せし其舌の根も乾かぬ中に手出しを爲てい母親へ辨解の無い此場の仕儀と血氣に逸る左の松も孝の一字に逆はれず拳を握りて猶豫さまを見やる五人い打笑ひ「思ッたよりい意氣地の無い女子に劣つた金太郎箇樣な者に搆はずと早く歸るが上分別と勝手次第な罵詈を並べ盡して五人ともうち連立て歸りしを母への孝と勘忍の拳を握る金太郎が手出しも爲さで猶豫し心の中い如何ならん看客宜しく察し給へ母と女房い之を觀て

一方ならず打歎び其より後い事も無く茲ゑ半年を過せしが素より金太い火掛りの消防の外にい是と云ふ商賣とても無き者あれい偶よ奇よと手慰みに其日を送る遊び人壺皿にのみ親み居しが此頃續く間の惡さに毫しも此方の云ふ目い出を出るとい取られ出るとい取られて多くの金を失ひけれい秋の初めのうそ寒さに單衣のみ身わ纏ひ今日の活計も足らぬ勝ち流石の金太も當惑し茫然として暮せしが毋

ハ又もや心を痛め金太郎を小影へ呼寄せ「親の光りと云ひながらお前もせ組の金太郎人にも大哥と言とる丶身で此比の品行の惡さ今日の煙も立兼る果敢ない暮しをするやうでハ此先々が案じられる何にも言とねど女房のお芳が始終の心配も少しハ察して遣るがいゝヨと異見をするさへ數回ありしが外面ばかりハ承諾しやうに見えても道樂の遊びを止る氣色も無ければ母ハ見のみ心わ懸け終よ疾病を惹起して重き枕わ就しかば金太郎ハ大いわ驚き醫者よ藥餌と騒立ち介抱に手を盡せども定まる老の命ありけん草の葉に置く秋の露旭も俟たで消果ければ夫婦の悲歎ハ一方あらず別て金太ハ亡母の異見も聽かで過したる後悔面わ顯とれつゝ涙ながらに死屍を菩提所へ葬り果て跡懇ろに吊ひけるとぞ茲に同町わ久しく住ふ搗屋のお龜と云ふ者あり四五年先に良人に別れ廿歳の上を五ツ六ツ越せし許りの若孀にて色香も失せぬ遲櫻散りも始めぬ婀娜者ありしが金太郎が勇み肌と男の好きに慮を焦がし折があ有ばと思へども金太郎にハお芳と云ふ立派な女房もある身なれば流石に夫とも言出し兼て其日〳〵と送りしが今日佐の松ハ消防夫の集合ありとて中橋の鍛冶と云ふ待合へ出行きたりし歸り路お龜わパッタリ出會ければ微醉機嫌に聲を掛け「お龜さん浮氣をして歩行ちやァいけませんせと言とれて此方も莞爾笑ひ「頭ぢやァ有まいゝ妾ハそんあ當ハ無いのサ夫ハさうと今ッから鰻と喰に往くンだが御迷惑で無いからば附合てお呉で無いか」と誘引るゝ儘金太郎が南傳馬町三丁目の今川と云ふ二階に登りて並べる皿も大串の脂の乘た對座色氣含みて指ヶ猪口の數も重ねて微醉の折こそ好けれと膝摺寄せ搦を着たる蔦蔓さだ色褪せぬ若孀のお龜が情に絆されて金太郎も其儘に怪しき夢を結びしとぞ

○第三齣

恁て金太郎ハ孀のお龜と割なき交情とありしより互ひに人の目襃を忍び或ひハ待合小料理屋と諸所方々の密會を此上も無き娯樂とし登り詰たる戀の山高い浮名の徒口を人にも噂せらるゝまで日毎に深く契りしがお龜ハ少しハ小金も蓄へ何不自由なく暮せし者ゆゑ金太郎の言がまよ〳〵博奕の資金と貸與へ後にハ衣類小道具まで金太郎に入揚

けれゞ同人の懷中ゝ思ひの外に都合好く毎日骨子のみ轉ゞして其日々々を送りしをお芳ゝいぶせき事ゑ思ひ且お龜との戀中も薄々ゝ覺りけれゞ悋氣交りに折々ゝ良人に異見を加へしを金太郎ゝ打聽く毎に却て痛く腹を立て口ゑ委せて罵り懲し果ゝ髻を引攫み打擲をする事さへ有て兎角に家内も穩かならねゞお芳が兄の秀次郎も打て變りし金太郎の心得違ひに眉ゑ顰め是も數回諫めたれども飽まで迷ひし佐の松ゝ空吹く風と聽流し更に用ふる氣色も無けれゞ秀次郎ゝ妹お對ひ「金太も馬鹿と謂ふでゝ無し水の出花の若盛り後先見ずの女狂ひで夢中になッて居るのたらうから目の覺るまで已の家へ和女を暫く預からうト金太郎にも委細を話し當時良夫の胤を宿して二月目なる妹のお芳を秀次郎ゝ我家へ引取り金太郎が後の容子と覗ひ居たるぞ頼もしき斯とも知らぬ佐の松ゝお芳が實家へ歸りしを結句氣樂ゑ事に思ひて雖憚からず彼のお龜と何時か我家へ伴ひ來りて夫婦の如く暮せしが始めの程こそ睦ましう何事も無く暮しれ出來合夫婦の習慣とて動輙すゞ彼此と夫婦喧譁の絶間なく折ゑゝ乾兒の熊次郎も見兼て止

あゞ爲し居たるに早や其年も暮果て翌る嘉永の二年の夏お龜ゝ風邪の心地とて枕に就し其日より次第〳〵に病苦を增し一ト月足らずも煩ひて果敢なく鬼籍に入しかゞ例の如くに葬りつゝ僅かに七日ゞ過たゑ折實家へ預けし女房も流産せしとの報知を聽き斯まで不幸の累あるゝ貞實を盡せし女房に强面く當りし罰あらんと茲に始めて後悔しけれゞ金太郎ゝ氣を取直し何がお商賣を目論見て是まで人お嗤はれし其取返しを若ん者と種々に工夫ゞ運らしつゝ漸く寄席を町内へ設けて見んと思立ち中橋邊の得意先より二百兩の金を借り終に同所の横町へ佐の松と云ふ寄席を開き熊次郎の其外に二三人の男を抱へて盛に開業を爲したりしが當時京橋近邊お寄席の少き折なりけれゞ毎日客ゝ群集して山爲す計りの大入に思ひの外に利益もありて僅か二年の其間に資本の金を返せし上巨額の金を蓄へたるにぞ一日金太郎ゝお芳が實家ある秀次郎方へ赴きて是迄の心得違ひをさま〳〵に謝たる上お芳を引取り歸らんと言へゞ此方も大きに歡び早速お芳を引渡せしかゞ是迄よりゝ幾倍も夫婦中よく暮せしが男子心と秋の空變り易きが習

にて頃しも嘉永六の年米國使節ペルリ氏が浦賀へ來りて開港の談判ありし當座あれば人心恟々として穩かならず攘夷鎖港の激論い此時よりして喧噪しく幕府に於ても兵器を整へ防禦の策嚴重にて品川沖へ一二ケ所の臺場を新たに增築せんとて直ちに工事に取掛り府下の消防夫一同を此が人夫に宛られれば金太郎い世話役の中より交りて同所に赴き彼此指圖を爲し居たるが不圖朋友に誘はれて同驛の土藏相摸へ四五人連にて押上かお谷といへるを敵娼とし一夜の興を尽せしに金太郎い敵娼の行届いたる待遇と婀娜ある容姿に現を抜し其後も數々通ひしをお谷も憎からぬ事に思ひ勤めを離れし待遇に末い夫婦と契りしかば佐の松い此家にのみ流連なして日を送り我家へとてい一月に一度も歸らぬ程なれば女房のお芳い云ふに及ばず乾兒熊次郎も心配して數回相摸屋へ迎ひよ往き漸く家へ伴ひ歸れば三日も經ぬに家を拔出でお谷の許へ通ふなど精神ありとも思はれねばお芳い獨り心を痛め當時俠婦と評判高きおさのと云へる大年增い以前消防夫の親分なりし彌惣次と云ふ者の女房にて喧譁口論の中に通入て口あとを利く顏

役あれば夫金太郎お諫諍を加へ連歸つて呉るやう涙あがらに頼みしかばおさのゝ容易く之を諾ひ土藏相摸へ自ら赴き流連酒の酔さへも未醒やらぬ金太お對ひ理非を分たる強意見に佐の松も是迄の身の不品行と後悔せし面に眞實顯はれければおさのも共お打歡び其夜ゝ藝者やお酌と招き總頭其他の行渡りもさよの獨りが之を負擔け共に此家に一泊して翌朝家へ連歸れば金太ゝ流石女房の手前お耻て我家の居數も常より高く覺え て夫より後ゝ謹敕く三月ばかりを過せしお今日しも盆の十三日御盆迎への日あればとて佐の松ゝ佛壇に亡き父母の位牌を飾り心計りの供物を手向て日の暮るまで佛を念じお芳ゝ實家の手傳ひにと晝より出て家にゝ在ず寄席も休みの折あれば金太郎ゝ樣側に端居なしたる夕納涼過すともなく二更頃まで肌に風を入居たる折から裏手の切戸口とホト〳〵と敲く者あり誰おや有んと立出て切戸を開けば此ゝ如何ゑ土藏相摸の買ひ朋樂お谷が華美お座敷着にて獨りで尋ね來りしあとば夜更も厭はず嗜獨り登へ來たのゝ容子が有う幸ひ嬶アも留守中にて誰よも遠慮ゝ入ぬから內へ還入て其譯を詳細く己へ話しなせえト言ゝれてお谷ゝ嬉しさうお座敷へ通る其折から何時の程よか立歸りし熊次郎が聞耳立て此場の容子を窺ひけり

○第四齣

お谷ゝ傍へ摺寄て「日外お別れ申した時書く逢とぬと仰しやつたれと其中どうか都合をして來て下さるのを娛樂に務めて居たのも空頼み半年餘うも顏さへ見せず臨で怨んで居ましたが上州邊の田舍客が此頃繁々通ッて來て是非とも妾ど身受をそるとて樓主へ疾に熟談と付けたと鴇母さんから聽いたけれと妾ゝ如何した惡緣やら頃と見捨て他の男子と添遂る氣ゝ毫しも無く夫も僅かに四五日と身受の期限が迫ッて來た故頃に逢ふてとッくりと好い分別が聽たさに未だ宵の間の混雜紛れおやッと座敷を脫出して漸う茲まで來ましたが斯う云ふ中も心が急く早く好い考案が有るなら聽かせて下さいト口說き附かれて金太郎ゝ是まで夢と斷念し心も再たび何處へやら蚊遣ゝ疾に消果たれと復もや起る煩惱の胸の火焰ゝ消やらで坐ろに不便の念を爲し「和女がさう云ふ心お

ら己等も是で男子一疋上州あとの百姓に先を越されて身受をされちやァ己等の顔が潰れる道理よし〳〵今夜此足で直に樓主へ掛合て必ず先へ受出さうシ又邪魔にある女房い三行半で追出しやァ天下晴ての和女が殘妻沁配せずに居るが能いト言辭も未だ終らぬ處へ次の戸を引開けて走り出たる熊次郎が「親方夫い興實ですか縱令一時の戯言でも夫ぢやァ細君へ濟まをめえせ頭が是まで遊蕩に身が入り日にち毎日流連の留守の中さへ蹴ゑども憎氣嫉妬の沁い無く折にい諫論も仕あそッたいお家の爲を思ふばかり夫を頭い振棄て出所の知れねえ古狐こんな女と見換るとい餘まり情が無さ過やす又此阿魔も此阿魔だ折角頭が此頃い謹慎をして居る處へ態々化して來やがるとい面の賜い畜生発化の皮を顯はしてとッとゝ逃て往けト主人を思ふ一応に爲る言辭に金太郎い憤然と怒りて睨み附け「入ざる處へ口出し出て主を主とも思とぬ野郎共そんな男に用い無い今日から乾兒の縁を斷るから勝手な處へ出てうせろト發言りてい止まらぬ勇み堅氣の一徹よ煙管を把ッて立上り撲ちも掛らん權幕と支ふるお谷諫める乾兒扶に

縋りて止めれどもいッかな利かぬ有樣ゑ熊次郎い詮方なく悄然を立出ける今に始めぬ事あがら賢人才子も色慾の道にい迷ふが常あれば況てや憑氣と俠氣のみ磨ける佐の松金太郎が思ひ込たる一筋よお谷の身受をせぬ時い己が顔にも拘くる道理と妙な處へ理窟を附け乾兒熊次郎が親身の異見も却て仇と聞流し儲蓄の金を懷中して其夜相撲屋の店に到り身受の事を相談せしに金太郎い其以前多くの金を手放れ能く時散したる得意客樣にい消防夫の親分樣よて幅を利かせし者あれば樓主も同人の顔を立て身受の事を承諾かずば後の爲にも惡かりあんと先口の客人へい能き程に虛構らへお谷い貴丈へ差上ませうト早速承知の有樣よ佐の松い身の代金若干を同家へ與へて無事にお谷の身を受出し翌日れ谷と改名て妾とおして我家へ引取り雛愛からず暮し居たるを實家より歸りし女房い夫が嫉る有樣に居い漫猿しとい思へども素より言ふて返らぬ事にて且い妾の名目なれば是まで品川へ通詰め多くの金を徒費ふにい遊かに優りし事あらんと流石利發の性質あるお芳い早くも心着き嫉妬の念い遂しもあくお谷と姉妹の緣を結び中

睦てく學し行くにぞ夫も愛堵の思を爲し茲に月日を送りしが原と此お谷い品川の賤しき漁師の娘にて奸智に長たる女なれバ外面い柔和の体に持て做しお芳と中好く暮し切丶乾兒其他の雇人をも懇を盡て使へども内心い猛き鬼薊針持つ駒

を色にも出さず頻りに本夫の棚蟻を取り本妻お芳が身の上を思ひさにのみ密告して敵
唆すことも有しかゞ佐の松い眞事と思ひ常にお芳を强面く扱ひ折檻すること數々あり
しがお谷い外面女菩薩の表部に柔和と粧ひしも打て變ッて此頃い内心の夜刃を露はし
てお芳を頻りに罵りつゝ是見よがしに金太郎と奥の二階で靈間から對座ある小鍋立但
た物夫婦の俚諺とい齟齬たる女房お芳い厩ひの女中と同樣ゴ爨炊の業や雪雪の寄席の
茶番や木戸番と離飜として動くい餘所の觀る目も氣の毒あれとお谷い却て能い氣味と
言はぬ計りの有樣に乾兒の者も看るに見兼折々主個に異見をすれゞ傍よりお谷い口を
出し夫い大方お芳さんが妾と旦那の好い交情と艶美しさに入れ智慧してお前に異見を
言はせるのだらう嫉妬やさにも困ッた者だと焚附られて金太郎い心惡い女房の擧動と
突然二階を駈下て有合ふ煙管をさろくの笛身體に疵の絶間も無き强面きお谷と本夫の
心に堪へ〳〵し女房お芳も餘りの事と歯を切ばり口惜し涙お咽びしが終に疾病と惹
起して床に就たる有樣い次回に委敷說出さん

○第五齣

衰弱ふる影に思ひも十寸餘曇り勝なる悲歎の心をうつす面もおく磨き榮せぬ貞操ゴ獨
りお芳い物置の二階と奥の裏表壁を隔てゝ隣家にい本夫とお谷が痴話狂ひ私語く聲の
み耳に入り疲れし身さへ眠られず思ひ妾の擧動と病苦を餘所に怨みの一念お谷が手づ
から調理し粥や肴い一口も咽へ通さぬ我慢の氣象い疾病に勝得ず漸次と憔悴はてたる
お芳の身い宛然風然の燈火同やう最も危き其處へ男に優る氣象ぞと評判高き女丈夫の
おさのが病氣の見舞に來りて容体なとを細々と問慰さひる眞實にお芳い涙を流しつゝ
「姉御にい御親切に餡あそ見舞て下さいました妾が今度の此病氣い助うる目的も有ま
せんが唯怨みなのい那お谷ト是より彼が良からぬ擧動を今度の病氣の起因など泣つ歎
つ漸うと物語るさへ蟲の息聞取るおさのも諸共に涙の袖を絞りしがさう云ふ譯あら此
さのが屹度金太に譴責を加へお谷い酷い憂目に遇せて和女の復讐をして遺るから氣を
堅固にして待て居なト力を付くる甲斐も無く是を現世の名殘としてお芳い脆くも其日

の夕終に命を落しければ四五日容体と問もせざりし夫金太郎も打驚き斯まで早く死ぬるとい思ひ掛なき事なりしと遽りに家内い立騒ぎ混雑一方ならざりしに斯と聞たる秀次郎もおさのも再び馳來り悔みの詞い言もせずお谷の顔のみ睨詰め脇目も振らで居たりしとぞ又手有るべきに非ざれば次の日死骸を葬りしあ流石名を得し佐の松が女房の葬式あれば會葬人も員多く一番二番の消防夫を始め落語家其他の雑人おど千人近くも見送りけり茲に至つて金太郎も始めて迷の夢を醒し夫より後い一心に寄席の家業に精出しければ夜晝とあき大入にて益す繁昌せしとぞん然るあ金太郎が身の上に一ッの災害を起すべき椿事こそ出來あけれ开を如何と原ぬるあ時い安政二年の春二三人の仲間が佐の松の木戸口へドヤ〳〵と入來り何か話しを爲し居るうちに少しの言葉の間違ひより下足番の太七と云ふ男と爭論を惹起し二ッ言三言罵合ひしが氣早の太七い堪へ兼ね拳を固めて一人の頬を目掛て撲掛り疵を負はせし騒動に仲間共い大いに怒り復讐に後程來るから覺えて居ろト言放ち其儘逃て歸りし間も無く足輕仲間破落戸おど六七十人押寄せ來り中あも頭と覺しき男が長き刀に反と打ちつゝ木戸口にて大音揚げ「最前手下の仲間へ傷を負はせし遺趣復しに向ふたり出合へ〳〵と呼はりければ最前喧嘩の對手となりし乾兒の太七い打驚き斯と主個に告しらば事暴立て雙方に負傷おど有ていー大事と其儘戸外へ飛で出で太七と大地へ引据つゝ拳を擧て散々ょ骨も摧けと撲懲し又武士ょ打對ひて「最前是れなる乾兒の者がお屋敷の御家來衆へ無禮を働きました由不埒い申す迄も無けれど高が知れたる寄席の木戸番お手討にあされたとてお手柄と云ふ譯でも無く殊にい箇樣に大勢でお取捲なさるゝ程お手强い對手と云ふでも無ければ何卒今日の出入だけい此家の主個の私しへお預けあすッて下さいましト詫れと此方い聽入れず「汝が乾兒の無禮あら取も直さず主個の無禮兩個を手討にした上で寄席の建家を破毀して腹いせをする素意で來さから汝も其氣で覺悟をしろト言つゝ佐の松の顔を視て「汝い先年上野にて我組下の足輕ょ抵抗をした鳶の者ト聖掛られて金太郎が「さう言ふ足下い山脇文吾思ひ出せば八年前而も上野の花見時往來繁き廣小路で搗出す

鐘も入相の花を散せし狼藉者を己が止たを遺恨よ思ひまた此寄席を立ぬ前此横町の自宅へ來て煙管で己を撲ッたのと「覺えて居るのい顔の疵而も形い三ケ月のチラと姿を認めた上い昔の遺恨をまた重ねて爰で明るく晴さうから雲に隠れて逃ぬがいゝ」「夫い此方で云ふ臺詞だアノ時己へ慈母が異見を爲ねえで呉たあら足下の首い無え處だ今ぢやア異見の爲人も無えうら

八年振の遺趣復し足下の命を貰ふから己が對手に爲ンなせえト忽ち入る力瘤勢ひ着たる金太郎が着たる衣服をかなぐり捨て犢鼻褌ばかりの裸体となり脊中に鯨し魯智深の勇にも劣らぬ意氣込ゑて傍の鳶口取るより早く脇目も振らず群りし敵の中へと分入れば傍よ

容子を覗て居たりし乾兒も此に勵まされて各々得物を打振てソレ親分と助けろト續いて戸外へ走出せバ斯わるべしと待構へし膳所本多の足輕始め雇ひ來りし破落戸共ハドッと相圖の鯨波を揚げ一度に得物と振翳し金太郎等を中に圍みて打殺さんと犇くを佐の松い事ともせず長鳶口を振廻して右に薙伏せ左に蹴散し必死を極めて戰ふにぞ靜かある世の常磐町も忽ち修羅の街と奈り空の蒼々も色變て四邊に飛散る血汐の紅葉勇ましくも亦凄じき折しも北より蟇々地韋駄天走りに馳來りし卅近き勇みの男が夫と見るより手早くも同く衣服を脱却て多勢の中へ割て入けり。

○第六齣

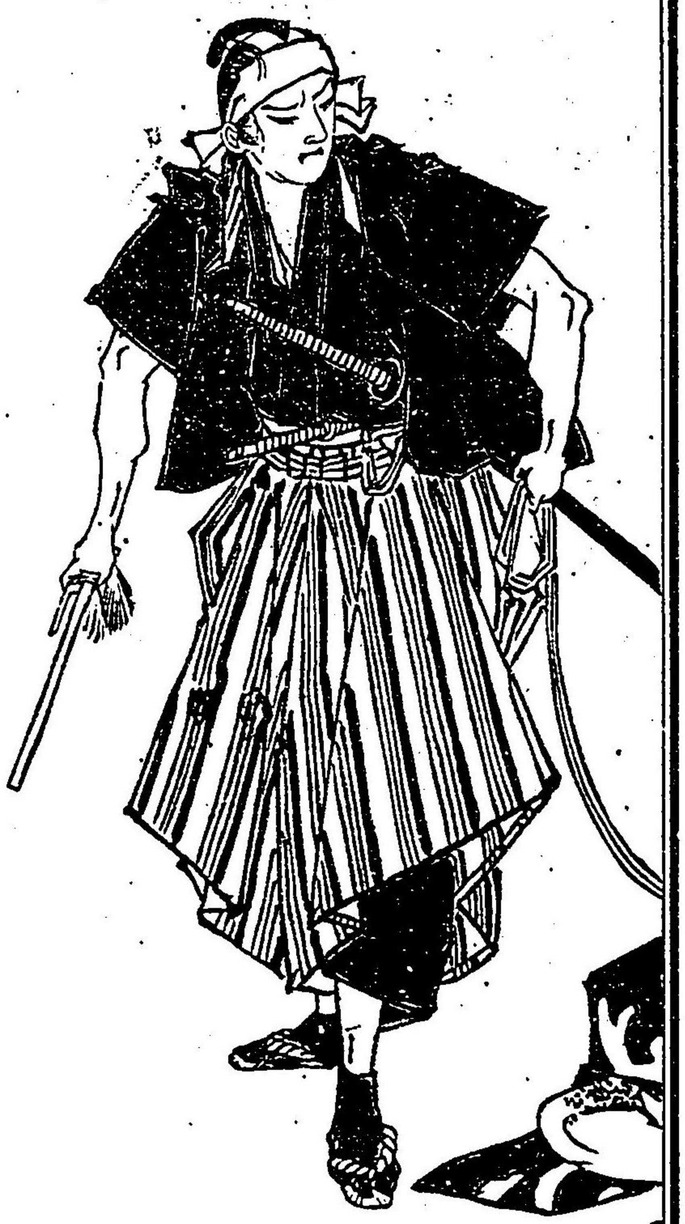
白刃の稻妻掛聲の霹靂とも覺しき中へ懼めず臆せず駈入した襲に金太郎より出入を止められ乾兒の緣さへ斷れたる正直者の熊次郎にて戰ひながら大音に「親分先刻風說を聞きやァ膳所本多の足輕共が貴丈の家を毀す積りで押寄せたと云ふ事だから跡から距きに出掛て來やしゝ人こそ違へ八年前同じ本多の足輕共と喧嘩としたを根に持て貴丈よ

遺恨と復しに來たのも素と己から起ッた事もゑ茲で己の働くのが切てハ昔時の恩返し親方其氣で掛ゝなせえト力を附る一ト言に金太郎も勢力加はり益す心を勵まして必死と戰ふ有樣い最と目覺しく見えけるがさしも多勢の本多方も金太郎等が力と戰せ一同命を拋ちつゝ戰ふさまに僻易し氣後れしたる折なれど二十人にも充たぬ計りの佐の松方に薙立られて傷を負ふ者少うらず浩る處へ自身番の訴へを聞くより早く定巡りの同心達も取鎭に馳向ひ新場の小安を始めとして消防夫の頭分あど孰れも止めあ駈附けつゝ漸く雙方を引分けつゝ事の原因を問糾し又怪我人を調べられしに本多の手にてハ卽死一人傷を負し者夥たしけれバせ組の者にハ療養の手當抔と爲すべき程の怪我人ハ一個も無く其爭鬪の起因も大概に分りけれバ發當人の金太郎ハ忽ち縛しめられたる上其筋へ拘留行かれ何時赦免とも知り難き獄の裡に繫がれけれバ家内の者や乾兒等の心配すると一方ならず其が中にも熊次郎ハ對手の中に其以前己へ喧嘩を吹掛し膳所本多の足輕も交り居りしと云ふのみか金太郎ハ山脇の往時の遺恨を復さん爲に此擧動を惹起

せしと聽てい毫しも猶豫せずそんおゝ今日の間違の原を質せバ此己から起ッた事ゐ相違い無いと心が付いた上からい自身で頭の罪を引受け自首て出て親分の赦免を願ふが上分別と獨り心に

頷づきて仲間の者ゐも告知さず直ちに北の奉行所へ自ら駈込願ひに出で今度起りし大喧嘩い全く私しの所爲にて金太郎の存せぬ事も乞何卒彼をお赦ゐりて發當人の私しを御法にお當下され

たしと舊主を思ふ一心より惡びれもせず訴へ出しと其筋にても親分の佐の松が身を助けん爲に名乘り出たる者あらんと疾より推察するものから猶其儘ゐい案置き難く其儘獄中へ押籠れしが當時幕府の掟として一人の駈込願ひい採用られぬ事なりしが人と殺せし罪人あれば其儘假牢に押籠られ其家主をも呼出して尙其仔細と糺されければ熊次郎い初めに變らず膳所本多の足輕共を或ひい殺し傷つけしい皆私しの所爲ゐて金太郎い存せぬ事と憶する色あく言出ければ一日金太郎と熊次郎い聽て白洲に引出され正面にい町奉行池田播磨守威儀を正して糾問の席ゐ着ければ左右にい與力同心肩を並べて列座せり時に池田い兩個ゐ對ひ「熊次郎の申立てにい今回喧嘩の主謀者い自分なりとの事なれども現ゐ其場へ向



ひたる役人共が認めし處い其本人い金太郎ゐ相違なしと云ふのみあらず當人も亦己れの所爲と白狀ゐ及びたれば汝の願ひい採用難しと最と嚴かに演られしを熊次郎い押返して「縱令金太郎が何樣ゐ申立てと致しましても素と此對手い熊次郎が年來の讎趣ゐ

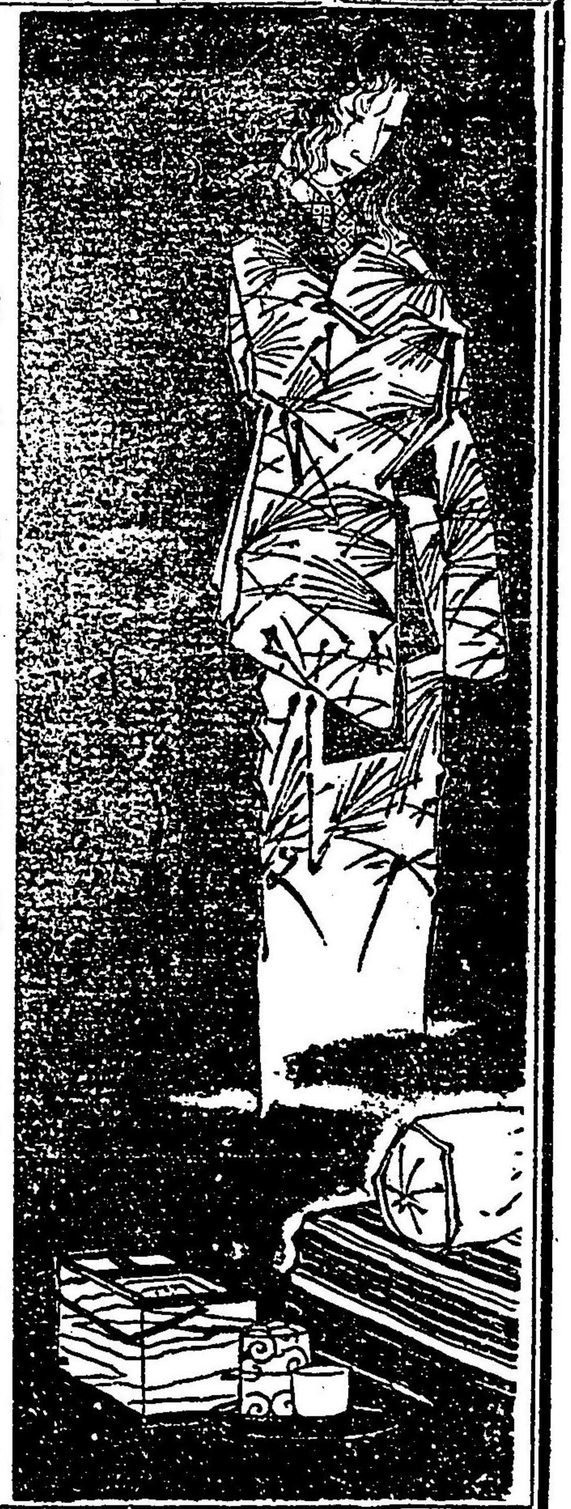
る者にて手出しを爲しゝ斯申す私しゝ相違なく金太郎ゝ此喧嘩を支へんとせし迄なれゞ何卒政府の明斷ゝて彼が罪を御免し有るやう只管願ひ上ぎすと言ふ傍らより金太郎ゝ「熊次郎が申立てゝ此身の罪を引受んとて訴へ出しに相違あけれゞ彼ゝ其儘放免ありて此金太郎を何處までも御法にお當下さるたしと互ひに罪を身に引受け果しも附かぬ爭論に早や半日と過しけれゞ是日ゝ其儘法庭を閉られ尙其實否を糺されしゝ全く膳所本多の足輕共が亂暴を働きしを防がんとての爭鬪なりしと事明白に分りなれゞ町人の身を以て武家ゝ對して抵抗あし剩さへ一人を殺せし罪ゝ輕からねど格別の御慈悲にて金太郎と熊次郎とゝ入牢を申附け其外の乾兒の者ゝ構ひ無しと申渡され兩個ゝ傳馬町の獄ゝ送られ爰に一年を暮せしが又もや其罪を減じられ翌る安政三年に放免の身となりしかゞ兩個ゝ無事ゝ我家に歸り親類縁者ゝ云ふに及ばず組の消防夫一同を我家に招きて盛んなる祝宴を開きしとぞ然るに乾兒の熊次郎ゝ以前の恩義と忘るゝ事あく且同人の出入と禁ぜし主個の無法を憤やらず今爰の喧嘩に命と拋ち親分を救ひしのみか其罪までを身に引受け訴へ出し義侠に金太郎ゝ感じ入り同人の諫めを用ひずお龜を我家へ引取しゝ重々の誤りありしと熊次郎ゝ深く謝入り更ためて同人ゝ乾兒の取締り役と委ねし上然る可き家柄よりお定と云へる娘を引取り金太郎が媒仇よて熊次郎ゝ配偶せつゝ最と睦しく暮せしとぞ

○第七齣

孫子曰く死地に投じて而して後に生實ゝ苦ゝ樂の世の中にて一たび金太郎が喧嘩の爲に獄に入しと云ふ事と遠近とあく聞傳へて同人の乾兒に爲らんと言迄ひ者も最と多く忽ち評判高くあり從つて又別業の寄席も漸次に繁昌しけれゞ消防夫の仲間よても自然と勢力を得たりしかゞ日毎に金錢を蒔散して遊興に耽りしのみあらず火事場に赴く時などゝ自分ゝ垂駕籠に打乘りて乾兒に前後を取圍ませ徐々火元に到るあと專ら驕奢を極めしとぞ恁て其年も果敢なく暮れ翌る安政四年の春よりお龜ゝ疾病の床に就き枕も上らで暮せしと金太郎ゝ打見やりて「思ひ出せゞ三年前和女の色香に迷てされ宅へ入

たいばつかりに義理ある女房を強面く扱ひとう〳〵死おして仕舞たも素と和主から起ッた事實い此頃目が醒て離縁をせうと思ッて居たがまんあ病氣で居る者と手放す譯にも行かぬから全快をる迄世話こそすれ是も因果の廻りだらち

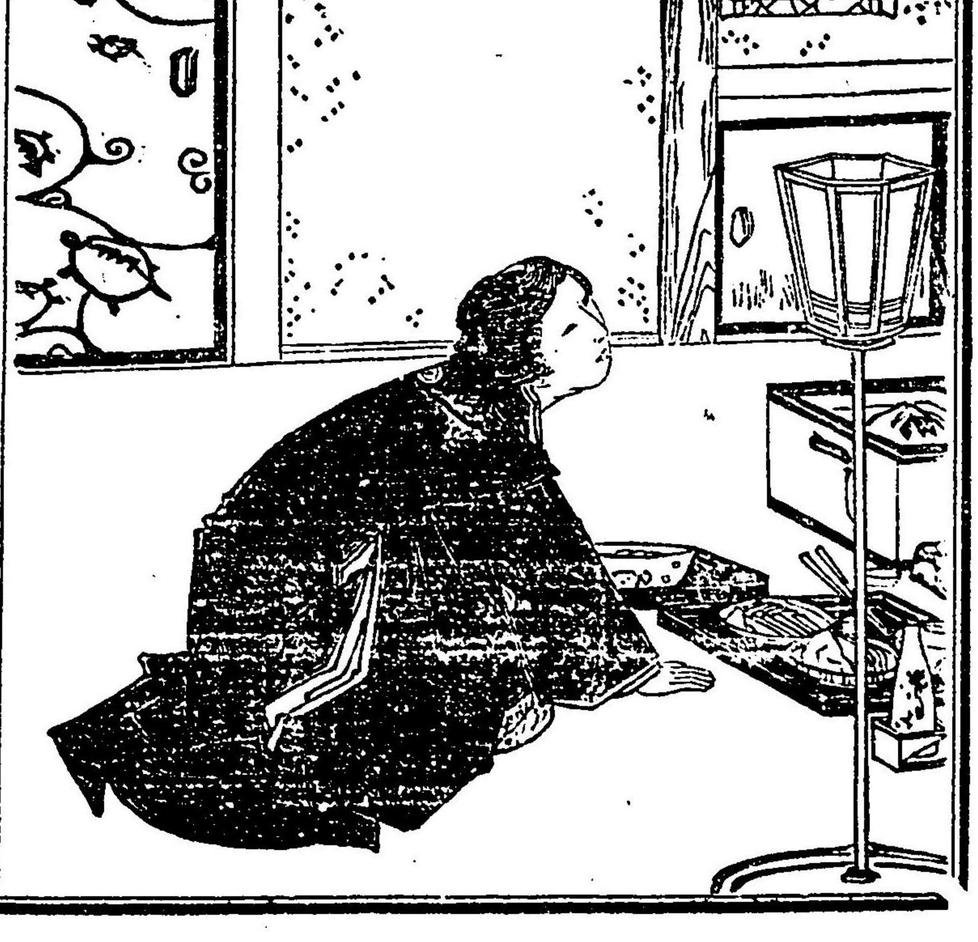
からマア諦めを附るが能いト夫と云いねど應報の道理をさへ説聞せバお龍も一々胸あ當り而も今年い三回忌月こそ變れ先妻の死た其日に疾閉しも一ッの不思議と云ふのをか而も以前の物置を建直したる小座敷の同じ處で煩ふい若し祟りでい有まいかト元より心の佞けたるお龍も少し怖氣立ち其日よりして氣力も弱り食も進まぬ体ありしが不思議ヤ其夜の夢の中に先妻お芳かあり〳〵と我枕邊よ露れ出で最と怨めし氣に睨みし



と見たる儘にて醒たれど是より忽ち心狂ひて夜晝とあく大聲よて囈語をのみ口走り妄が邪見よばッかりして和女に碌々藥餌も上けず見殺し同樣に致したのゝ死でも罪ゝ消あいがどうぞ後生に苦しめず成佛させて下さいませト言ふかと思へバカッバと發起き四邊の土瓶茶碗あどを壁を目掛て投付る最と恐ろしき有樣ゑ雇人等も怖がりて晝より外ゝ看護もせずお龜ゝ日と經て衰弱ゆれど去とて遽かに死もせず當比金太郎が馴染と重ねし日本橋の小芳と云ふ藝妓が見舞に來る度に恐怖るゝと一方ならねバ近所の者ゝ先妻のお芳が祟りを爲す者にて殊ゑ名前も似寄たる小芳よ靈の乘移り怨みを晴せるならん抔を評判をする事も有しがお龜ゝ長く狂ひ若み終に命を落せしかバ例の如くに死骸を葬り香華を手向て吊ひけり爰に又金太郎が復び獄に繫がる可き一つの災害を惹起せり扨を如何にと原ぬるに當時芝居小屋の外ゝ俳優と集へて狂言を演する事を禁せられ唯首振の木偶のみを許され居りし時なれバ此首振の名目よて十六七と頃にして十歳までの子供役者ゑ寄席にて狂言を演する事當時專ら流行しけれバ佐の松にても岩井粂吉、中村駒次など云へる子供の役者を雇入れ太夫ゝ竹本梶太夫三線彈ゝ勇造にて操り芝居と興業せしよ日毎に客の山を作し爪も立ざる大入にて且駒次にゝ近邊の柴田と云へる豪商が後見同やゝ最負ゑ爲しせ組の者よも緣者ありて同組の鳶の者も一同肩を入たれども粂次ゝ僅かに大根川岸一ケ所の最負ゑるのみ勢ひ駒次の下に屬き諸事同人に劣りしを少年ながらも殘念ありとて頻りゑ藝道と磨きけるとぞ茲に藝州廣島の城主松平安藝守の奥女中を勤むる中に其名を龍田と呼ぶ者あり素より藩邸の掟嚴しく或ひゝ物見遊山あども心の儘にゝ出來ざれども一日龍田ゝ私用ありとて戸ケ關の邸を出で侍女あどゝ諸共に常磐町と過る折から佐の松にてゝ操りの今幕明と覺しくて拍子木の音喧すしく最と面白げに聞ゆゐにど幸ひ今日ゝ髮かたちの人の目に若く事も無けれバ一幕見物して往かんと同伴の女中と敎唆し勸て棧敷に打通りて日の暮るまで觀てゐりしが彼の年少ある粂吉が男の好きに心動きて忽ち身に染ひ戀風の襟元塞く思れれつゝ忘れんとする由も無けれど同伴の人目に隔てられ心殘して悄然と其日ゝ邸に立歸り翌

五拾兩を三吉に視て莞爾笑ひ「少し不足の禮金だが初めて逢た貴孃に愛想盡かしと言ふでも無えから今日は此儘歸りやせうが又此金が無くなッたら折々遊びに來やすから細く長く交際て愛顧にしてお呉なせえト氣障の言葉を後にして三吉は立歸りしかば龍田はポット一息吐き部屋へ歸ッて獨言「嚴しい邸の掟を背き淫猥な行ひとした事が早くも人の耳に入り今日の强談に出逢ふと云ふのは悪事千里の世の譬」是から後は糸吉に逢ふ事を慎んで事の發覺を防ぐが上策併し割あき糸吉との交情と袋くのも心殘り此りや如何したら好からうと獨り思ひ案の其折柄糸吉の親長四郎が龍田に面會し度き由にて來りしと云ふ

取次お恰好幸ひ同人は今日の始末を物語り後の事をも相談せんとて其儘部屋へ通しければ同人はおづ〳〵と頭を疊に摺附て先づ寒暖の挨拶終り今日態々參上せしはチト折入たお願ひが有ての事で御座りますト長四郎は聲を低め「是迄豚兒の糸吉が一方ならぬ御愛顧受けお禮は言葉に盡されませぬが兼々お話し申す通り同じ仲間の中村駒次に毎も贔負のお客が糸く豚兒も日頃是のみを殘念がッて居ました



日又もや唯獨り佐の松の寄席に赴き狂言の果るを待ちて近邊の割烹店へ粂吉とじめ仲間の俳優と此粂吉の假親ある長四郎さへ招き寄せ酒肴など取寄せて只管彼等を待遇したる上多くの櫻頭をも取らせければ粂吉い大ひに歡び首いつと知るき大名の奥女中とも見受らるゝ龍田の愛顧を得る時い出世の端とありもやせんと尊閑あらず敬ひし是ぞ生島新五郎や繪島が昔しに似寄たる身の災害になるぞとい知るや知らずや粂吉と龍田い如何ある契りや爲しけん嬉しき夢もみつ扇末廣かれと約しつゝ駒に疊みて立歸る折しも次の襖の影より此場の容子を窺ひ居る一個の怪しき曲者ありしが何か応に頷きあから急いで茲を立去けり

○第八齣

却説も安藝家の奥女中龍田い國らず粂吉と怪しき夢と結びしより其移り香の忘られず其後も折々人目を忍び粂吉と忍び合しと誰知る者も無かりしが一日取次の侍女が龍田の部屋へ馳來り貴孃にお目に掛りたいとて職人体の男が參り取次と請ひます故名前を問へと名乘ませず唯だ此品をお目に掛れば分る者だと申しましたと差出す品を龍田い請取り包みを披けば是い如何に日外始めて粂吉を或る割烹店へ招きし折に忘れ置たる扇子あれば偖いとばかり胸にギックリ兎も角遣ふて話しをせんと件んの男を女中部屋へ窃かに招きて面會せしに此の破落戸い膝摺寄せ「お目に掛るい始めてだが已い九尾の三吉と綽號を呼ばるゝ遊び人日外京橋の割烹店で貴孃が始めた俳優買ひ驚者あ遊びが羨ましさに後から續いて二階に登り聞くともあしゝ身の上をすッかり知た計りで無く時晩夢に魘はれて怪しい夢まで聞いた故切てい貴孃ゝあやかるやうお近附にありたいと態々尋ねて來ましたがホンの土産の印ばかりゝ持て來たのい此扇若や他人に拾はれたら貴孃の大事にある處金で買ない代物ゆゑ其御返禮を當にして茲まで出掛て參りやしたト奥齒ゝ挾む長口上に此方い彌よ胸轟き戰慄く膝を押靜め「夫い何より御親切たいした報酬もす可きなれど何を言ふゝも婦女の身の上たんとい心に任せねど是いお禮の印ばかり足下へ進上致すから唯だ何事も穩便ゝ早く歸ッて下されと差出す包をの

五拾兩を三吉に視て莞爾笑ひ「少し不足の禮金だが初めて逢た貴嬢に愛想盡かしと言ふでも無ふら今日に此儘歸りやせうが又此金が無くなッたら折々遊びに來やすから細く長く交際て愛顧にしてお呉なせえト氣障の言葉を後にして三吉に立歸りしかば龍田にポット一息吐き部屋へ歸ッて獨言「嚴しい郎の掟を背き淫猥な行ひとした事が早くも人の耳に入り今日の强談に出逢ふと云ふのに惡事千里の世の譬是から後に粂吉に逢ふ事を慎んで事の發覺を防ぐが上策併し割あき粂吉との交情と發くのも心殘り此りヤ如何したら好からうと獨り思案の其折柄粂吉の親長四郎が龍田に面會し度き由にて來りしと云ふ

取次に恰好幸ひ同人に今日の始末を物語り後の事に相談せんとて其儘部屋へ通しければ同人はおづ〳〵と頭を疊に摺附て先づ寒暖の挨拶終り今日態々參上せしは折入たお願ひが有ての事で御座ますト長四郎に聲を低め「是迄豚兒の粂吉が一方ならぬ御愛顧受けお禮に言葉に盡されませぬが兼々お話し申す通り同じ仲間の中村駒次に毎も贔負のお客が來く豚兒も日頃是のみを殘念がッて居ました

が今度駒次と糸吉と千代萩の政岡を一日代りに勤める筈よて駒次い衣裳の襠を愛顧の者より貰受け支度も疾に整ひましたを豚兒も是に負ぬ氣で襠と整へましたが何と云ふにも駒次の分い巨額の金の費ッた品も名豚兒の友裳い迎も及ばず就てい貴嬢い御殿向をお勤め遊ばすお方ゆゑ若し万不用の襠あらば興行の間拜借し糸吉に之を着させて駒次に鼻を明かせ度しと思ッて願ひよ參りましたと折入ての頼み事い龍田も暫し打案じ「實い妾の身の上に少し心配の事もあり今日も今日とて云々の強談に遭し當座あれば成丈け此後い糸吉殿と遠ざかッて居る妾の所存足下にも亦打明て相談をする素意で有たが折角の衣裳のお頼み無情く斷るも本意で無ければ恐れ多いが御臺様より拜領ものゝ襠を内々貸て進せようと蒔繪箪笥の抽斗より取出したる襠い見るも眩耀き縫摘様四邊を拂ふ計りなるを龍田い指しさて言ふやう此御召物い御臺所即ち將軍家慶公の御妹末姫君が當家の主人安藝様へ御輿入の其砌に着し給ひし襠にて最も貴ひ品なれば妾が拜領せし後い未だ袖さへも通せしと無し憚り多き事あがら之を暫く貸申せば必ず人お沙汰をせず大切お着たまへかし併しながら葵の御紋と其儘置かば忽ちに政府の咎めを受るに必定是い縫師に言附て必ず形を變させ給へと最と懇篤に說聽かせば長四郎い此上なく歡び「斯る貴き御召物い容易お手にさへ觸られぬと俳優の身お着らるゝい全く貴嬢のお蔭にて御恩い死でも忘れませぬ殊お箇様お立派お物を糸吉が着て勤むる上い上様の御威光をお借申して評判と必ず取るで御座りませうと彼の襠を押戴き許多たび禮を述つゝ肩に背負て歸りしが佐の松にてい狂言の稽古も既お終りたれば早や明後日い開場んと準備も出來たる柄あれば襠の紋所と縫改た見る暇も無く僅かお三ッ葵の一葉だけを黒き絹にて縫包み其二日目に糸吉に着せて舞臺を勤めさせしに前日駒次が着て出し襠よりい幾倍も優りし衣裳の立派さに見物共い呆氣よ取られ藝の見分い後にして此襠と見んもので毎日客い木戸に押掛け當時稀なる大入にて糸吉の評判い忽ち高くなりしとぞ

○第九　齣

當今府下の寄席の中よりも最も潤ひ者と雖も五百人の見物と容るゝと以て限りとすれども佐の松い奥行深く間口も廣き家ありけれゞ日毎の見物千に餘りて當時に無き大入なりしい彼の粂吉が襤の立涙あるに因れる者にて駒次が政岡を勤むる日にい見物の數大いに減じ六七百に止まりけり掛れゞ粂吉の評判い益す高くあるものから金太郎い襤の事ふい少しも忍附かず唯た粂吉の藝道が駒次に遙に優りし爲に斯く大入ゝ爲せしと思ひて後にい毎日粂吉に政岡とのみ勤めさせ駒次ゐ役を當ざりけれゞ同人の送り男い最と口惜き事に思ひ去にても彼の衣裳い如何ある品ゐ檢査見ゞやと一日襤を手に取て其紋所とよく〳〵視るに是ぞ葵の紋付あれゞ偖い公儀をも憚からず斯る衣類を着用して大入を取りしあらん良し〳〵此旨を訴へ出で駒次の評判を墮させたる敵を取て遣らんものと件んの男い當番所へ委細を訴人に及びけれゞ何とて猶豫の有べきぞ召捕の者五六人直ちに佐の松へ馳向ひ折しも舞臺い粂吉が今御殿場の飯焚を勤め居たる真ッ最中御用の聲と諸共に忽ち索ゐ羅りけれゞ何事あらんと見物が一度にドット噪ぎ立つ其騒

動ゝ一方あらず斯る騒ぎの有ごとも白川夜船の金太郎ゝ先程飲し酒横嫌に前後も知らぬ晝寐の夢を忽ち捕手に呼覺され且看れゞ各の索を手繰て捕縛らんと奔く体に心の中にゝ何事ぞと打驚くを色にも出さず「假令公儀の嚴命でも此金太郎ゝ縲絏の辱と受べき覺えゝ毛頭無し御用とあらゞ此儘にイザ御同道致さんとて南傳馬町の名主ある高野新右衛門方に赴きしが茲ゝて始めて御紋付の衣裳を着せたる罪ありと金太郎ゝ応附たしが金太郎と葵吉とゝ直ちに北の番所へ送られ一應調べありけれゞ葵吉ゝ匿すに由なく全く薩州公の奥女中より此襠を借用せしに御紋と改むる暇あく僅かゐ葵を一葉減して其儘着用せし旨を明々地に白狀しけれゞ公儀を憚からぬ大罪ありとて直様入牢を申附けられ金太郎も席元なれゞ縱令其事ゝ知らずとも葵吉と同罪ありとて俱ゐ獄裡に下されけれゞ又もや家内や乾兒等が歎きの程も大方あらず此事早くも世の中の大評判とありしかゞ龍田ゝ大いに打驚き上より拜領の御召物と賤しき俳優に貸たる事既に露顯に及びし上ゝ此身ゝ忽ち罪せられん其お咎めを請さる中に潔よく自害して身の大罪を償いんと流石ゝ武家に育ちし婦女覺悟を極めて懷劍にて咽喉を見事ゝ掻切て終ゐ敢なく死去せしゝ慶應元年の事ありしと却説も金太郎ゝ傳馬町の牢屋に在ると一年餘り空しく月日を送りしが彼ゝ婆娑ゝて名を得さる消防夫の親分あれゞ同じ獄に繫がるゝ囚人も亦彼を敬ひ諸事その指揮ゝ從ふにぞ其筋ゝても金太郎を牢名主の格に昇せて其取締を命じたりしが慶應三年の春に至りて終に出牢と申渡され江戸構ひの身となりし故常磐町の我家ゝ乾兒の熊次郎夫婦に預け是より先に中橋の蔵妓小芳との間ゝ擧けし伴金次郎と伴ひて横濱へ立退しに同港の消防夫共ゝ佐の松が此地へ來るとて一同神奈川まで出迎ふあゞ一方ならぬ景氣にて金太郎ゝ從弟ある源八と云ふ侠客が同地ゝ住しを幸ひに源八方へ同居を頼み暫く足と止め居たるゝ幾ばくも無く國中に一新の變動起りて王政復古の基を開き明治の初年となりしかゞ金太郎も構ひを解かれ晴ゞ東京に往來して悴金次郎に常磐町ある佐の松の寄席を守らせ彼の熊次郎を後見とし自分ゝ横濱仲通りへ一ッの寄席を開きしゐ運の盡ざる處にや日を經て繁昌に赴きしに同年の十二月

外神田より出火して見る〳〵市中に燒廣ごり常盤町の佐の松亭も灰燼と成果ければ町内の者共い是非金太郎を横濱より呼寄せ寄席を再興させんものとて金主ゐあらんと云ふ者共が同人を呼迎へて普請の事の相談ゐ半月餘りを過せし折から横濱よりの急飛脚が金太郎方へ來りて一封の書ゐ差出すを何事やらんと披見るに横濱の縣廳より至急に罷出よとの御沙汰ありし趣きを乾兒の者より知らせ越したる文面なるに不審い晴ねど御用とあらば忽せゐ棄置べきに非ずとて大根川岸より船に乘り日横濱に立歸りて整朝縣廳へ出頭せしかば掛りの官吏面會ありて其方を呼出せしい相談の筋ありての事あり抑も安政六年に當港を開きしより僅か十年に滿ざるゆゑ兎角市中い淋しければ其繁昌を增さん爲め劇場を比地ゑ建させんとて羽衣町に空地あるゑ貸與べしとの御趣意なれど未だ座元とかり得べき人物を認めざりしゑ其方い港内にて人望のある男にて乾兒も兼く養ふ由此事を相談するい其方の外よい有まじと思ひて呼出したる次第あり熟考をしてお請をせよと思ひ掛ぬき懇命に応中大いに悦べ共三萬兩の資本無ければ容易に劇場い建て難し兎にも角にも熟考して御返答に及ぶべしとて五日間の猶豫を請ひ復び東京へ立歸りし後の説話い次回に記さん

○第十齣

急ぎ東京ゑ上りたる金太郎い二三人の金主を集へて縣廳より談示の筋を物語り金策の事ゑ相談せしゑ一同も雀躍して首尾好かりしを悦べ共萬ゑ越たる大金の容易く整ふ道も無く額を寄せての相談に空しう三日を過せし中に金太郎が横濱へ劇場を建る目論見なりゑ早くも噂をする者あれば若し此儘に已ひ時い顔にも拘ゑる一大事何卒金を整へて首尾よく事を仕遂んと心い千々に遇れども早や明後日い返答を爲べき日限に迫りし事もゑ又も横濱へ立歸りて相談を爲さんものゑ其夜再び船に乘り品川沖へ漕出せしが折しも乘合の客の中ゐて服裝も立派な町人が金太郎に打對ひ「貴丈い佐の松の頭でい有ませんかゑ聲掛られ其商個の顔の視れば豫て見知の豪商ゐて横濱本町に住ひせし立花屋の主個あるにゑ互ひに時の挨拶終り立花屋い膝を進めて「噂に聞けば我土地へ

今度親方が座元とあり劇場をお建あさるとやら此横濱の賑ふ事も名智待家て居りますが何時頃お創めなさいますと問えれで此方へ打頷き「實の處へ其劇場を建たい心で此頃へ諸方へ相談お參りますが何と云ふおも二三万の資本が無ければ出來ぬ事業迚も一手で請合ひ難く當惑として居りますとの談話を半分打聽かず頭の氣象も知た私し失禮あがら二三萬の金なら工夫を致さうから我土地の裨益を思ッて是非とも劇場をお建あさいと思ひ掛かさ立花屋の義氣ある詞に金太郎へ夢でへ無いかと疑ふまで打歡ぶこと一方あらず猶さま〳〵に語らふ中ゑ船へ横濱へ着しかば彌ゑ立花屋と劇場の金主に願む事お相談整のへ其筋へもれ請に及び羽衣町の空地を借受け直ちに建築に着手り翌年全く落成しなれば東京より上等の俳優を招きて開場せしに横濱にてへ始めての芝居

興行の事なれば日毎に客留めの大入にて其後も芝居を演つ毎ゑ評判最も好かりしとなん是ぞ當今横濱に今猶巍然と存在せる羽衣座の成立にて人書佐の松の運好きと事に撓まぬ奮發心を感せぬ者へ無かりしとぞ是より前に常磐町ある佐の松の寄席の様へ親類の者に讓りて悴金次郎を始めとして乾兒の者をも濱へ引取り金太郎へ同地お て益す其名を輝かして茲に五年を送りしに同年(明治六)の夏よりして金太郎へ疾病ゑ罹り重ゑ枕に就しかば家内の者へ手を

盡して看病怠たりあらざりしが醫藥も終に効驗なく六十年を一期として果敢なく鬼籍お入しにぞ家内を始め四五百人の乾兒の歎きい大方ならず懇て神奈川の香華院へ死屍を葬りしが此柩を見送る者い横濱神奈川い言ふよ及ばず東京の頭分より藝人藝妓に至るまで三千餘人の多きお至り横濱より神奈川まで會葬人い打續きて絶間も無かりし程ありしい死後の名譽と云ふべくになん此時までも家に在て萬事の世話を爲し居たる乾兒の熊次郎夫婦の者い親分を見送りたれば年寄し身で何時までもお世話になるも心若しく夫婦世帶を持たければ何卒暇を給はれと金次身に別を告げ其儘同家を立出しが何國へ往きしか踪蹟知れず折々金太郎の墓に參りて香華を手向くる者と見え熊次郎が名刺の見えしい最と殊勝なる心掛けと人皆感じ合しとぞ恁て二三年と過せしに金太郎が死去せ一後い何分金次郎一手よてい彼の羽衣座い持切れず終に同座も他手に渡し乾兒の者よも暇を出して幽かに其日を暮し居たるが此頃金次郎も疾病お罹り終に亡しくありしかば此、よて佐の松の血統も絶え唯だ金太郎が横濱にて持ちし妾の某のと今猶横濱に暮し居るとぞ又岩井条吉も維新の際に放免とあり當今信州松本の某方の養子となり無事に其日を送り居るとか恁る名高き親分様の血統全く絶果しい最と惜むべき事ありと或人の長物語りを傍お在て聞書の矢立の筆と閲き侍りぬ

國書附て云ふ此物語りの中佐の松の刺繍を魯智深とせしい誤りにて且常盤町の類燒い慶應三年の由あれば茲に誤認を正し置きぬ

佐の松縫綉葵禰大尾

事件

明治十七年五月五日御届
同　年五月　日出板

編輯人　東京府士族　野崎城雄　芝區神明町廿七番地

出板人　東京府平民　鈴木喜右衛門　日本橋區藥研堀町四十三番地

東京地本同盟組合之章

東京横山町二丁目十六番地　鶴聲社
同　本郷春木町三丁目十三番地　奥吉五郎
同　淺草北富坂町十三番地　村上眞助

大賣捌

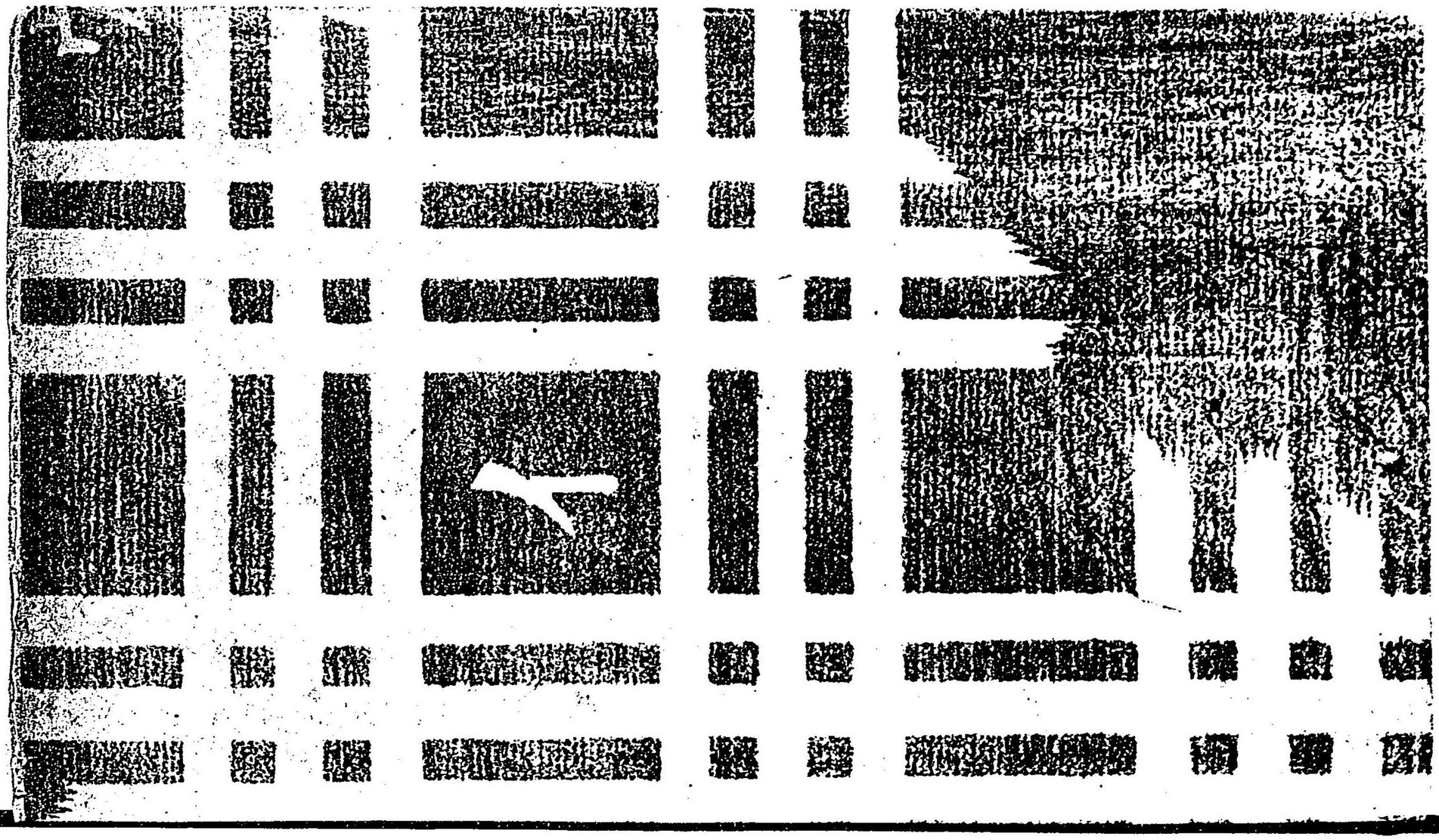
（定價金拾八錢）

假名垣魯文原稿
孤蝶園若菜編輯
稲葉猴雪燈新話　稲野年恒畫
一冊讀切　定價金三拾錢
右ハ稲葉小僧野晒お雪が邪毒の兇狀人を殺し財と掠めし虎狼夫妻が傳記を綴りたる美麗の小冊あれバ江湖愛顧の諸君子御購讀あらん事を乞ふ

孤蝶園若菜著　稲野年恒題畫
四十八手角力古實櫓太鼓音高砂　一冊讀切　定價金三十錢
右ハ現時相撲組の取締高砂浦五郎が勇敢義俠の履歴を最興深く綴作たる美冊あれハ御購讀を乞ふ

琴亭文彦著　歌川國松畫
佐の松事件縫綉葵裲襠　一冊讀切　定價金拾八錢

右ハ俳優粂吉と或る諸侯の奥女中龍田と密會の始末より佐の松金太郎の勇敢義俠亡妻お由の怪談等面白く綴りし冊子あれハ御愛讀を乞ふ

栗庵宇山編輯　一事庵史槃校
現存名家俳諧太陽六百題　全二冊
右ハ現今有名の宗匠諸大家の佳句玉吟集成たる書ゐて此道に遊ぶ諸君子必讀の冊子あり

此他和漢新古書籍牌史小説類何品によらず非常の低價を以て賣捌ハ間陸續御注文被下度奉希候
東京日本橋區藥研堀町四十三番地
書肆　鈴木喜右衛門